

思春期における不登校経験者の両親イメージの研究

—対象関係の視点から—

A study of the image of parents those who have experienced school refusal during adolescence

—From viewpoints of object relations—

大用 ゆきの

Yukino Daiyo

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：不登校，思春期，対象関係

Key words : School refusal, Adolescence, Object relations

1. 研究目的

近年，不登校の増加は社会問題となっている。文部科学省の調査（2024）によると，小・中学校における不登校は過去最多の 346,482 人（前年度 299,048 人）と大幅に増加している。

不登校は「自分自身のこと」「家庭・家族の影響」「学校でのこと」の 3 つの要因が絡み合って発生しており，なかでも，対人関係をめぐる問題が不登校に大きな影響を与えていると考えられる（小柴，2017；子どもの発達科学研究所，2024）。対人関係上の問題を抱える者は親子，友人，集団と相手が変わろうと同じ問題を繰り返しうるとされている。精神分析的な人格理論では，この繰り返す対人関係性を対象関係という。

本研究では，対人関係の基礎となる親子関係に着目し，対象関係の視点から不登校当事者の両親イメージに焦点を当てた。両親イメージの変化と不登校の回復プロセスをそれぞれ明らかにし，両親イメージの変化が不登校の回復プロセスにどのように影響するのかを検討した。

2. 方法

調査対象：中学生時代に不登校になったものの，早期に学校復帰を果たすことができた不登校経験を有する成人女性 3 名。縁故法により，長年不登校支援に従事している児童精神科医師に「現在は社会的活動を行っており，不登校経験を抵抗なく語れる方」を紹介してもらった。

調査期間：2024 年 9 月から 10 月に実施した。

調査方法：研究参加への同意を得たのちに，対面

又はオンラインにて半構造化面接法による家族イメージ法 (FIT) を用いたインタビュー調査を実施。尚，本研究は 2024 年度大妻女子大学生命科学研究倫理審査委員会の承認を得て行った (受付番号：06-003)。児童精神科医師の所属先の承認も得た。

調査内容：インタビュー項目は，①ご本人の基礎情報，②不登校前の状況について，③不登校時の状況について，④学校復帰後の状況についてであった。また，家庭での状況を伺う際に，両親イメージに関連して「不登校以前」「不登校期間中」「学校復帰後」の各時期における両親それぞれの人となり形容する語句を 5 つ回答してもらった。

分析方法：FIT 等による両親イメージの整理と M-GTA による逐語記録の分析を行った。

3. 結果と考察

FIT 等による両親イメージの整理の結果，不登校当事者の両親イメージは肯定的なイメージだけでなく，厳しい，あるいは過保護のイメージといった否定的なイメージを抱えていることがあり，不登校の経過に伴ってイメージが変化していくことが示された。

また，不登校の回復プロセスについて M-GTA による分析の結果，10 個の概念と 8 個のカテゴリーが生成された (図 1)。

不登校になるきっかけには対人関係不安や転校，体調不良などがあり，登校渋りの時期に親や学校の先生から出席を強いられる【強制され選べない】環境に置かれることで悪循環に陥って，不登校状態へと移行していく。不登校期間中には，不登校

に否定的な親や学校との関係は悪化する。この時期はスクールカウンセラー（以下 SC）や担任・養護教諭、主治医そして不登校に否定的な親とは別の親（ケアテイカーの役割を担う親）の存在が重要になる。彼らが不登校期間中の悩みや家族関係の話、その他にもたわいもない《私の話を聞いてくれる》存在となり【寄り添ってもらえる】体験をする。特に家庭のなかではケアテイカーの役割を担う親との情緒的な関わりを通して安定した二者関係を築くことが重要である。しかし、もう一方の親が登校を催促したりと本人にとっては《間に入ってくる邪魔》な関わりをすることで、安定し始めた二者関係を壊されそうになることもある。とはいえ不登校期間中は家族全員に【私中心の生活】を支えてもらうことになり、それが回復へのプロセスとなる。しかし、この【私中心の生活】は家族にとってたやすいことではなく、耐え切れなくなった場合には入院が家族を支える器として働くこともある。入院生活で家族と離れ、同年代の不登校児童生徒と関わりを持つことが、他者イメージの変化の重要な機会となる。【傷ついてもお互い様】であることに気が付いて、自らの意思で【この人には】これを話そう、【この人には】これは話さないといったように家族や友人、SCなどとの付き合い方を選択するようになっていく。上述のケアテイカーの存在が心の拠り所になる一方で、不登校によって親に迷惑をかけているといった罪悪感と自分の気持ちはわかってもらえていないといった【相反する気持ちにモヤモヤする】葛藤は持ち続けていた。そして、学校復帰のきっかけとして将来の進路に対する夢ができたことや、転校や進学といった環境の変化があり、高校入学に伴い自分で選んだ授業を受ける、自身の行ける日に登校するといった【強制されず選べる】環境になったことで、学校復帰に向かっていくことになる。

4. 総合考察

本研究の結果、不登校以前の両親イメージは不登校のきっかけに、不登校期間中の両親イメージは回復プロセスで重要な家庭での密着し安定した二者関係の構築に影響していたことが示唆された。

不登校以前は幼少期に怒られた体験などから「怖い」「何をやっても怒られる」といった厳しいイメージを持っていたという旨の語りが多かった。この両親イメージは思春期には「自身の攻撃性が他者を傷つけてしまう」といった無意識的な対象

関係となり、意識的には対人関係不安として顕在化することになる。その結果として不登校状態へと移行したといえるだろう。そのような対象関係は同年代の不登校児童生徒やきょうだいとの関わりの中で【傷ついてもお互い様】と気が付けることで修正されたと考えられる。また、この変化には悩み以外にもたわいもない《私の話を聞いてくれる》存在も重要であったと推察される。そして、親との密着し安定した二者関係や【私中心の生活】を通して不登校期間中には「安心する」という両親イメージを持ち、家族が安全基地のような存在として機能することで彼らの回復や成長を支えていたことが示された。

家庭内でケアテイカーの役割を担う親と密着し安定した二者関係を築くことに加え、本人にとっては《間に入ってくる邪魔》な関わりをするもう一方の親が二者関係に対して現実検討を促す第三者的な役割を担うことが不登校の回復プロセスに重要であると考えられた。さらに、本人が選択できる環境が大切であり、これらの要因が重なって不登校の回復へと向かったことが示唆された。

今後は性別や不登校のタイプ別、不登校が維持された例など対象者の拡大が求められる。

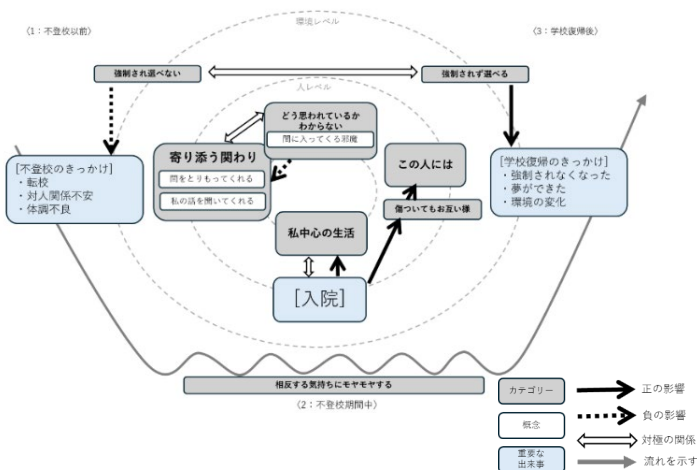


図1 不登校の回復プロセス

主要参考文献

[1]小柴孝子 (2017) .不登校発生の背景要因に関する研究-不登校経験者による内省的な語りの質的分析- 家族心理学研究, 31 (1), 43-55.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和6年度大学院生研究助成 (B) (DB2420)「思春期における不登校経験者の両親イメージの研究－対象関係の視点から－」を受けたものである。